

農家家族の多様な展開

— 成員の経歴に着目して —

石 原 豊 美

一、はじめに

農家出身者や農村出身者の経歴形成がどのように行われていくのか、その際に個々人の内部の要因、他者との関係、家族レヴェルや地域社会レヴェルの要因などがどのように関連し合っていくのだろうかといったところに関心をもつてきました。この関心の背景には、農業を職業としてどのように評価すればよいのだろうかという今日ますます重要な問題がある。この問題に対し何らかの接近を試みようとするならば、現在農業の担い手である人のみでなく、生涯の何らかのかたちで農業にかかわりをもつ多くの人々を考察の射程にとりこむ必要があるだろう。どのような人々が、生涯どの時期に、どのようななかたちで農業とかかわりをもつか、また（その可能性を有しながら）もたないのかといった問題をたてることが重要になってきていていると思う。

昭和六〇年に宮城県の米山町へ調査に出かける機会を得たときにこうした関心からの調査項目を組み込んで、男性農家世帯員の経歴に関する若干の情報を収集することができた。さらに、その翌々年には米山の同じ農家の女性世帯員についての調査を行った。男女世帯員の経歴についてあわせて分析してみたところ、全体として個々の

農家世帯員の経歴形成に家の維持・継承にかかわることがらが強い影響を及ぼしていることがわかつた。米山の調査事例は、全体として農外労働市場が未発達なかで比較的ゆたかな農業経営基盤と家族生活における直系制とが維持されているという点で特徴的だった。その後、米山とは就業をめぐる条件が異なるなかで農家の人々がどのような経歴を形成してきたのか、とりわけ就業形態の変化が大きいまばあいにこれが家族のあり方とどのようにかかわってくるだろうかといったことをたしかめてみたいと考え、今年二月に兼業深化地域に位置する滋賀県愛東町での調査を実施した。これら一連の調査により、地域的な条件を異にしさまざまなかたちの農業経営を営む家族の成員となっている男女三六九人についてのデータを得たことになる。

以下の報告では、この二地域での調査結果をご紹介しながら、農家世帯員の経歴とともに就業経歴の形成と農家家族について考えてみたいと思う。最終的には成員の経歴を積み重ねてみたばあいに家族がどう描けるのだろうかといった意味での家族の動態的な把握を目指しているが、今日の報告は、農家成員がどのような経歴を形成してきたのか、そのことと農家家族のあり方とはどのようにかかわっているのか、といった点を中心扱うことになる。

二、二つの調査対象地域の概況

さて、第一の調査地である宮城県米山町は、仙台から北北東へ五〇キロメートルほどのところにあり、東北地方の代表的な稲作地帯のひとつとしてよく知られている。この米山町のT集落の、三区まである農事実行組合の一区と二区に属する農家（四六世帯）と、そ

の世帯員のうち昭和四〇年以前に生まれた者（男性九四人、女性一〇三人）を対象として面接きとり調査を実施した。

米山町の、とくに調査対象となつたT集落ではI兼業農家の占める割合が高く（六〇・六%）、全国平均と比較してもまた宮城県のなかでみても独特な専兼別農家構成となつてゐる。農業経営としては、二ヘクタール程度の稻作に加えて小規模な畜産を取り入れているものが多い。この畜産は、高齢者のほかに昼間は恒常的勤務をしている若い後継者たちがしばしば担当していた。家族構成の特徴としては、国勢調査でいう「その他の親族世帯」つまり世帯主とその親族を中心とした者から成る家族のうち核家族世帯の形態をとらない世帯の占める割合が非常に高い（八九・一%）ことがあげられる。T集落ではこの「その他の親族世帯」のうち半数強が三世代家族であり他は四世代家族である。一世帯当りの世帯員数は五・八人となつており世帯規模が大きい。

第二の調査地の滋賀県愛東町は、琵琶湖の東岸に位置する。調査を実施したのは愛東町のO集落である。O集落の隣組一～十二のうち一組から八組までに入つてゐる農家（五三世帯）の昭和四〇年までに生まれた世帯員（男性七九人、女性九三人）を対象として面接きとり調査を実施した。

湖東地域では、名神高速道路開通の影響もあつて昭和三〇年代後半より急速に雇用機会が増大した。そのころから滋賀県全体でも兼業化がすすみ、現在では全国的にみても有数の兼業深化地域となつてゐる。愛東町のO集落ではII兼業農家率が高く八割をこえている。農業経営では、一ヘクタール程度の稻作のほかに数アールの茶を栽培しているものが多い。ただし、所有する水田を全部貸し付けてし

まい、茶のみを販売している農家が三世帯、同じく水田を全部貸し付けて自給野菜の作付のみとなつてゐる世帯が八世帯あることが注目される。家族構成では「その他の親族世帯」が六九・八%と多い。このうちほとんどが三世代型の家族であり、四世代のものは三世帯のみであった。平均世帯員数は四・七人とやや多い。

三、経歴の世代的な変化と地域性

このような二つの地域で農家の人々がどのような経歴を形成してきたのかをみていくたい。ここではさしあたり、「経歴」を次の二つの次元でおさえていくことにする。すなわち、一つは学校卒業—結婚—子どもの誕生—子どもの結婚といった本人や家族の経歴上のnormal eventsといわれる出来事の次元（これを狭い意味での「ライフコース」と称しておきたい）であり、もう一つは仕事上の種々の経験の集積としての「就業経歴」の次元である。

(1) ライフコースの世代的な変化と地域性

まずこの狭義のライフコースの世代的な変化と二つの地域での相違の有無をみるために、男性については学校卒業、結婚、あとつき誕生、同居あとつき結婚、父死亡のそれぞれの出来事を経験していくか否か、経験者についてはそのときの年齢をみた。また女性については学校卒業、結婚、第一子出産、末子出産、同居あとつき結婚、初孫誕生、夫死亡を主要な出来事として設定し、それらとあわせて子ど�数もみてきた。

男性のライフコースにかんする主要な特徴は、①教育終了が若い世代になるほど遅くなつてゐること ②結婚年齢に著しい地域差があること、の二点である。②についてもう少し詳しくみると、米山

の男性は愛東の男性よりも約四歳早く結婚している。この結婚年齢の差が両地域で世代をこえて維持されている。つまり米山の父は愛

東の父よりも四歳早く結婚し、米山の息子も愛東の息子より四歳はやく結婚する。このため、年長の世代について同居あとつぎ結婚時の年齢に一〇歳近い開きが出てくるのである。平均初婚年齢を統計でたしかめてみる限り、戦前でも宮城県男性の平均は全国平均よりせいぜい一歳若いだけである。滋賀県の男性は全国平均とあまり変わりない。米山の男性の早婚は、農業生産力が低く結の形成や住み込み労働力（＝「長手間」）の家族への取り込みが行われていた段階で多くの農業労働力の必要のために生じてき、それが慣習化され今日にいたっているのかもしれない。いずれにせよ、このことは米山において四世代家族が出現してくる理由の一つになつてゐる（もちろん四世代家族が成立するもう一つの条件として年長世代の寿命が長いことが必要になつてくるのだが）。

一方、女性の方は、両地域とも若い世代になるほど①教育を遅くまで受け②やや遅く結婚するようになり③早く末子を産み終え④少ない数の子どもをもつようになっている。七〇歳以上の女性の結婚年齢が約四歳、初孫誕生時の年齢が約一〇歳米山で愛東よりも若くなつており——これは特に愛東の女性の多くが高等科を卒業をしており、尋常小学校卒業後生家にいて農業に従事するだけだったあとしばらく生家にいてそのあと女中奉公に出、結婚が決まつた米山の女性と比べて結婚が遅くなりがちだつたことと関連している——、全体として愛東よりも米山の女性の方が〇・五（一・〇人多く子どもを産んでいるという点で地域差が認められるが、二地域

間の相違よりは世代的変化における共通性の方を強調しておきたいと思う。

（二）就業経歴の五類型

ききとり調査によつて得た就業経歴にかんする情報を、農業と農業以外の仕事それぞの経験年数、両方を経験しているばあいにはいずれが主か、農外就業の雇用形態は何か、経歴上の転換点の有無とその時期などに着目して検討した結果、次の五つの主要な類型を引き出すことができた。

第一は短期間の農外就労経験をもつわざかの例を除けば一貫して農業のみに従事してきた就業経歴の型である。これを「I・農業専従一貫型」（以下では単にI型と記す。II・V型についても同様。）と名付けておく。第二は農業を主とする就業形態を維持しながら中途より主として農閑期のみの臨時的な雇用による農外就労を加えることによつて農業専従から農業と農外就労との兼業へと転換した就業経歴の型である。これを「II・臨時的農外就労付加型」と名付けておく。第三は農業以外のきまつた仕事から農業のみまたは農業を主とする就業形態へと転換した就業経歴の型である。これを「III・農外→農業中心転換型」と名付でおきたい。第四の就業経歴の型には二つの下位類型が含まれる。ひとつは臨時的な雇用やめまぐるしい転職に特徴づけられる断続的な農外就業上の経験をふんだ末に安定的な仕事を見つけたものであり、もうひとつは最初は農業を主としており就業経歴の後期になつていきなり安定的な農外就業の機会を得たものである。これらをあわせて「IV・安定的農外就業獲得型」と呼んでおきたい。第五は学校卒業以来一貫して農業以外のきまつた勤め先に勤めている就業経歴の型である。これを「V・農

外就業中心型」と名付けることができる。

(三) 就業経歴の型の分布とその地域性

さて、以上の五つの就業経歴の型が二つの調査地でどのようにみられたのかをたしかめていきたい。まず全体像をみてみると、米山では男性はI型とII型、女性でI型が多く、また若い世代を中心として男女ともV型の経歴がみられるようになつてきていた。一方、愛東のばあいは女性のなかにI型の経歴が比較的多くみられるものの全体としては圧倒的にIV型とV型の経歴が多くなつていて。特に愛東の男性では半数以上がV型の経歴をもつていて。また、愛東ではII型の経歴がほとんどみられなかつた。III型の経歴は、米山では主として比較的大規模な農業経営をしている世帯の若い世代にみられたのだが、愛東のばあい男女とも大正末ぐらいまでに生まれ、戦前に京阪神方面での奉公（近隣町村出身の「近江商人」）が開いていた「店」への「店行き」や近隣の町（「近江商人」の留守「本宅」）へ女中奉公に出たという人たちがこの就業経歴の担い手となつてゐる。農業の内外の労働条件の相違が、このような就業経歴の地域性をもたらす重要な背景となつてゐると考えられる。

これらの就業経歴の分布について、年齢と経営耕地面積という二つの指標をくみあわせながらもう少し詳しくみておきたい。

米山では男性で農外就労を経験している（II、III、IV、V型）のは六〇歳よりも若い年齢層でありそのうち学校卒業後間もなく一定の農外就労の機会を得ることができた（III型およびV型）のは三五歳より若い年齢層である。ただし、三五歳より若い層でも経営規模の大きい世帯のばあいは、農業に専従したり（I型）農業を中心の就業形態への転換をとげたり（III型）している。三五歳～六〇

歳のあいだの層で最初から農外就労の機会を求めた（IV型）のは主として経営耕地面積が二ヘクタールより小さい世帯の男性であつた。同じ年齢層でも二ヘクタールより大きい経営規模をもつ世帯の男性は、日稼ぎ的な農外就労の機会の出現を待つて就業形態を転換した（II型）。

米山の女性のばあい、農外就労を経験した（III型）高齢者が存在しており、II型とIII型の境界が農業経営規模の一定の線としてあらわれないという点で男性と異なつていて。とはいっても、三〇～三五歳以下の年齢層で学校卒業後すぐに農外就労を経験した（III型およびV型）人が多くみられ、そのうち農業経営規模の大きい世帯の既婚女性で年齢の高いものを中心として農業を主とする就業形態への転換（III型）がみられるということは特徴として確認できる。

一方の愛東町についてみると、まず男性では農外就労を経験しなかつた（I型）のは七〇歳をこえ経営耕地が一・七または一・八ヘクタール以上の、ごくわずかの人にすぎない。また、六〇歳代～七〇歳代の男性のなかに、丁稚奉公を経験したあと農業に従事してきた人が若干いる。が、総体としてみると、七〇歳以下の男性の大部分は農業以外の仕事を主（IV型およびV型）としている。四五～七〇歳のあいだの年齢層では経営規模が大きいかばあいには農業とのかかわりのより強い経歴（IV型）をもち、経営規模が小さくなると農外就労のみの経歴（V型）を形成していることが多い。四五歳以下では経営規模と関わりなく一貫して農外就労をするようになつている（V型）。愛東の女性のばあいは六〇歳を境界としてそれより年長の人たちが主として農業のみに従事してきた（I型）。ただしのなかに結婚前に女中奉公をしていた経歴（III型）をもつ高齢者がいる。

四〇～六〇歳のあいだの年齢層では経歴の後期になつて農外就労を開始（付加）した型（II型およびIV型）がみられる。そのうち経営面積が一・〇ヘクタールをこえるばあいには農外就労を付加しながらも農業を主とする就業形態をくずさない（II型）例が若干みうけられる。四〇～四五歳より若い年齢層では、経営規模の大小に無関係に一貫して農外就労中心の経歴を形成しきてている（V型）。

ただ、ここで留意しておきたいことは、この二つの地域で、さまざまな世代の、さまざまの数の成員を抱え、さまざまなかたちの農業を経営している農家の世帯員の就業経歴がどのようにこのI～Vのような型として分立してくるのかということを説明しようとする際に地域的な大きな相違をこえて、年齢と性と農業経営規模が、指標として何程かの共通的重要性をもつてゐるという点である。すなわち、年齢は、どのような質をもつた農外労働市場がどの年齢層の男性女性それにたいしてどの程度開かれており、農業生産力がどの段階にあつた時期に何歳の人間としてある地域に生きたかといふことで就業経歴の形成に関わっている。性は年齢や地域性と深く関わりつつどのような一連の諸役割と人生の課題を遂行することを期待された人間としてある社会に生きたかを示す重要な指標となつてゐる。また農業経営規模の方は、それを維持していくためにどれだけの農業労働力が必要となりまたそこからどれだけの所得がもたらされるかを決定してくれるという意味でやはり就業経歴の形成に関わってくるのである。

こうしたことがらが就業経歴の複数の型を分立させる上で作用するということ自体と作用の方向とは、二つの調査地で基本的に相違ないと考えてよいように思われる。異なるのは、たとえば経

當規模に無関係にV型の就業経歴がでてくるのは米山では男女とも三〇～三五歳より若い年齢層であるのに対して愛東では四〇歳代より若い層であるといったような、就業経歴の型の分立の岐点の絶対値であると考えられる。

四、経歴形成と家族

以上の諸々のことがらは就業経歴形成上の実際場面では、相互に絡み合い、また家族内の生活面での役割や労働力配分の調整・再調整問題としてあらわれてくる。したがつて、家族生活や家族農業経営の維持・継承という観点からもう少し二地域での就業の実態を見てみたい。

米山では引退が比較的早くに行われており、たとえば調査対象女性のうち七〇歳をこえた人はすべて「仕事なし」であった。米山の女性のばあい孫の誕生を契機として「仕事が主」から「家事・育児が主」へと引退の第一段階をたどり始める例が少なくない。男性のばあいも六〇歳代では半数が、七〇歳以上になると三分の二が、「仕事なし」となる。こうした早い引退は、家族のなかで若い世代が早く結婚し、また農業労働力が必要なだけ補充されていることによつて可能となつてゐると考えられる。

愛東町ではこのような早い引退はみられなかつた。愛東のばあい六〇歳をこえた男女に「仕事が主」の形態がしばしばみられた。六〇歳代の男性では全員が「仕事が主」でありその半数以上が農業以外の仕事を主としていた。七〇歳以上になつても男性のほとんどが農業を主として仕事をしている。女性のばあい六〇歳代では農業を主とするものが六割、七〇歳以上になると半数強が「仕事なし」と

なるが農業や家事・育児を主としている者もある。米山と違つてこうした遅くまでの就業が可能となるのは、特に男性のばあい高齢者にも手近なところに就業機会があるという就業機会の有利性による。しかし、男女ともがこうして容易に「仕事なし」に退いてしまえないう事態がもたらされている背景として、家族内の若い労働力が勤務に出るため高齢者が農業を専ら担つたり「家事・育児」をひきうけたりせざるをえないという点も軽視できない。

愛東の就業形態にかんしてもう一つ気付いたことは、女性のあいだにみられる「家事・育児」専従の形態である。米山のばあいには「家事・育児」は原則的には引退の第一段階をあらわす就業形態であつた。一方この愛東のばあいには若い年齢層でも「家事・育児」に専従している女性が目についた。また就業経歴の型としてはIV型ないしV型に含めて分類されている中年の女性のなかにも、三年から一〇年ぐらいのあいだ「家事・育児」専従の期間をもつた人が何人かあつた。このような「家事・育児」に専従する女性が出てくる背景に、他の家族員が農外就労に出はらつてしまい家のなかに誰かひとり家事・育児担当が必要になつてくる、他の家族員の就労を通じてある程度の収入が保証されているばあい数年ぐらいは無理をして働きに出るよりも子どもの面倒をみてやる方を好む、といったことがある。また姑にあたる女性がIV型の就業経歴をもつていてようやく獲得した条件のよい就業機会を手放したなく、結婚を機に一度退職した嫁に当面家事と育児を担当してもらうことを望む、若い女性に嫁ぎ先として農家が敬遠されるという風潮のなかで嫁を迎える側の譲歩として（少なくとも当面は）何も「仕事（とりわけ、農業）」をしなくてもよいのでゆつくり子育てでもしながら家に慣れ

てほしいという条件を出す、といったこともある。当の女性自身が「家事・育児」に専従することをどう受け止めているのかも、一様ではない。事例的に二例紹介すると、たとえば子育てが一段落つき農業もそれほど手間がいらなくなつて余裕が出てきたと思つていたら今度は周辺で女性の外働きが始まり「事業主婦（的な生活）」がしていられないような雰囲気になつてきたという女性（五二歳、IV型・高卒—農業／「家事・育児」—電気部品組立工場事務）がいた。また、結婚時に予想していたとはいえ夫が勤めに出ていた間子どもとの世話をしながら病気の親族と義父とで留守番をしていることがだんだん苦痛になつてきていた、末の子どもが保育園に入つて再就職できたときにはホッとした、という話をきかせてくれた女性（三二歳、V型・高卒—役場事務／「家事・育児」—網戸製造工場作業員）もあつた。

さらに就業経歴の転換点でどのような要因が作用したのかをみてみると、雇用条件や農村独自の情報網もさることながら、家族生活と家族農業経営の維持に深く関わることがらがしばしば契機となつていることがわかる。

米山の若い男性の例では、（いつたん他出しても親から呼び戻され早期に配偶者を迎えて親世代と生活を共同し、農業に従事したこと）早期に配偶者を迎えて親世代と生活を共同し、農業に従事したこと（III型）家族農業経営が十全に維持されていることを前提とした上で農外就労をする。愛東の中年男性の例では、昇進を伴う単身赴任が兼業農家経営の維持を不可能にするという理由から辞職して農業と両立可能なつとめ先を探す。当面の農外収入が減少しても「兼業」の可能性 자체を優先させる。こうしたことは、農外就労上のキャリア形成という点や求職時の自由さという点からみればしばしば逆

機能的なものである。ここでは経済的な合理性や機会追求の自由とは次元の異なる、家系と家業（としての農業）を維持し継承するべき——が強く成員の経験を支配している。

またそもそもあとづき男性の多数が生家から離れて生活した経験をもつてない（ただし、米山で学校卒業後に就職のために、また愛東で大学進学や奉公の延長のために、何人かが数年弱他出した）。これが、直系制が成員の経験に及ぼす影響の大きさを示唆している。

米山の女性の例では、農家の婚入によつて生家での農作業の手伝いとは異なる、本格的な農業労働力として家族のなかに取り込まれ、子どもの成長と農外就労機会の出現に条件づけられて日稼ぎを始める（II型）。この日稼ぎは農業従事と矛盾しない限りにおいて行われ、義親の病気や孫の誕生によつて中断したり終止したりする。愛東の女性のばあい、米山のような慣習的な早期の引退はみられなかつた。しかし、他の点にかんしては米山の女性と同様に家族生活の出来事によつて経験の断絶や転換がみられた。恒常的勤務の形態をとる米山や愛東の女性（V型）でも、学校卒業後の最初の勤めは結婚や妊娠・出産によつてしばしば中断となる。結婚後の農外就労は、総じて、農家の主婦としての役割と両立可能な範囲内で行われ、家族の病気や家族の就業形態の転換などによつて中断する。女性もまた、家族経歴上のさまざまな出来事への適応を原則的に第一義とすることによつて、この家系と家業の維持・継承という規範に服していると考えられる。

五、農家家族の多様な展開

もつとも、原則としては以上のようなことが、「家」の維持・継承という規範への対応の仕方は多様である。こういった規範からさまざまなかたちで逸脱していく例にももう少し目を向けながら、「家」の継承にかかる価値のどのような変化と相伴いながら進行してきており、それが農家家族のどのような変貌をもたらそそうとしているのかについて考えてみたい。

あとづきが配偶者を迎える世代と同居しながら家族揃つて農業に従事する。生産力の段階や農業経営の規模に応じて労働力を調整しながら年長の者はやがて生産の場から引退していく、それに代わつてまた次世代の若い労働力が育つ。これらの家族が生活の場面でも適切に役割を分担しながら共同して暮らす。これを専業的農家の原型としておく。こうした農家家族の再生産の周期は違つても、米山にも愛東にもこうした原型的な家族があつたと考えられる。ここでは、家の継承ということが、実際にはそれぞれの地域や個別の家がもつ慣習や事情のなかで多少のヴァリエーションをもつて行われていようとも、ともかくも一体としてひとつの規範をなしており、家の内部の個々の成員の経験を予め決定していたと考えられる。

今日までに多くの農家はこのような原型からの変化を経験してきた。変化の契機として注目されるのは何よりも農外就業機会の出現である。若い世代を中心とする農家世帯全員が農外就業に出でていく。このことの影響は幾段階かにあらわれている。米山を特徴づけていたのは、若い世代が農外就業を中心とする就業経験（V型）を展開

しながらも畜産部門を担当したり土曜や日曜には必ず農作業をしていたということである。つまり、農外就労をしている若い男女が農業から全くはなれたところで仕事し生活しているわけではないという点である。また生活面では「完全同居」が行われている。愛東の調査事例のように兼業が深化しているなかでも、基本的にはこうした形態——生活は家族が共同し、農外就労は農業経営が何とか維持されている限りにおいてその範囲内で行われている——が多かつた。

ここでは生活とくに居住の共同という点に基軸をおきながら仕事の面での農業専従から農業とそれの維持を前提とした上での農外就業とへの分化がみられるのである。言いかえれば、それまで一次元の価値であった家の継承ということが、同居によって支えられる家系の継承と家業としての農業の継承との少なくとも二つの次元に分化しつつあるということになる。また、愛東町で幾例か出会ったのだが、親世代と若い世代とのあいだの生活様式の相違からくる緊張緩和のためや、若い世代が夫婦中心の生活を志向するために、生活のいくつかの場面を分離することも行われてきた。こうしたことは、外的状況の変化に対応する仕方として今まで日本の多くの農家が選択してきた兼業農家化のあり方だといえる。しかしこうしたこと自体は、家の継承、農家の農家としての再生産にとつて打撃を与えるものではない。

農家の再生産ということが問題になつてくるのは、ひとつには農外就労を第一義とする就業経験の発生によつて農業の継承がなされなくなつてしまふばあいである。愛東の調査事例ではすでに水田をすべて貸し付けてわずかの畠に高齢女性が自給野菜や贈答用の茶を栽培するのみとなつてゐる農家が少なくなつた。また父親が農家

をできなくなつた時点で貸し付け農家化する意志を表明する人にも出会つた。農地の所有の主体ではあつても經營をしなくなつてしまつたばあい、こうした家族は少なくとも狭義の「農家」とは区別される家族に変質していると考えた方がよい。ここでは農業経営の主体としての農家は消滅し、家の継承は「家系」の継承といふかたちでのみなされることになる。

農家の再生産が問題になつてくるもう一つの方向は、居住の完全分離によるものである。あとつぎ他出によつてひきおこされる後繼者不在の問題である。調査対象となつたあとつぎ不在農家のなかでは、あとつぎが帰家する見通しのない農家が多かつた。残された單身や夫婦の高齢者のなかには、機械作業のみを委託に出し、自分が生きている限りこの家の農業を守つていくと話した人もあつたが、農地を賃貸したり、さらに夫の死に伴う相続問題など絡んで土地の切り売りをはじめているものがあつた。こうして農家成員が家系の継承と家業としての農業の継承の双方を否定してしまつたばあいには、残されるものは血のつながりとか姓とかいつたもののみとなる。

もうひとつ付け加えておきたいことがある。それは家族にとつての不測の「危機」とそれへの対応ということである。男性労働力の突然の喪失（病気、事故、戦争などによる）は残された家族にとつて大きな影響を及ぼす。ここで家業の維持のために高齢女性が引退をおくらせたり若い男性が進学を断念して早々に就農したりした例がうかんくる。また女性が病人介護のために農外就業をいつたん中断することもしばしば見受けられた。これらは家の維持のための成員の経験転換ないし経験の方向付けの例である。しかしその一方

で、例えば膨大な医療費など現金支出を要するばあいにやむをえず土地や家産を処分していくことも行われ得る。家系の維持が行われている限りにおいて家業の再興はやがて可能であるかもしれないが、いずれにせよこうした危機的状況は家の継承と成員の経歴を大きく揺さぶる要因となるのである。

六、おわりに

二地域での調査結果からまず経歴形成における地域性と世代的変化について確認し、つづいてそうした差異を包み込んでいる農家成員の経歴形成と農家家族の維持・継承という問題について若干の考察をすすめてきた。

農家成員の経歴にとつて家の維持・継承という価値は一つの所与としての重みをもつており、この価値から全く自由に経歴を形成していくことはあり得ないのではないか、ということを感じている。ただし、その一方で、外的な環境の変化に条件づけられて成員にとつての経歴形成上の選択の幅は広がつており、また家の維持・継承をめぐる規範も確実に変容している。こうした内外の要因に影響されながら変化していく農家家族の姿をより適切に捉えるために、もう少し論理をととのえていく必要があると思つてゐる。

(五月七日の研究会報告原稿をもとにして加筆・修正を行つた。)